

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：34509

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16673

研究課題名（和文）近代日本の視覚文化におけるプレ・シネマとしての歴史的機能

研究課題名（英文）A historical function of visual cultures as pre-films in modern Japan

研究代表者

上田 学（Ueda, Manabu）

神戸学院大学・人文学部・准教授

研究者番号：80546143

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代日本におけるプレ・シネマの視覚文化に関し、幻燈と博覧会を中心に、初期映画との関係性を明らかにする実証的な研究を進めた。具体的に、広範な資料調査を通じて、前者について、浅草の幻燈文化と初期映画との関係を、後者について、明治期の博覧会における初期映画の位相を明らかにした。また、上記に加え、弁士（無声映画の説明者）と多様な口頭芸の関係性、および地方における映画館文化にも分析の対象を広げた。具体的に、前者は浪花節と弁士の連続的な関係を、後者は徳島県西部における劇場から映画館への移行の事例等を調査考察した。

研究成果の概要（英文）：This research pointed out the relationship between Japanese early films and pre-film cultures, focusing on magic lanterns and the expositions based on the material evidences. Specifically, in extensive surveys, it became obvious that the Asakusa's magic lantern culture was related to Japanese early films and those films were screened in the expositions in the Meiji era. Also, this research expanded the analysis to the relationship between Benshi (film explainer) and various oral arts, and to the cinema culture in the rural areas. Concretely, the research surveyed the connection of Benshi with Naniwabushi songs and investigated the transition from theater to cinema in the west area of Tokushima Prefecture.

研究分野：映像学

キーワード：映像学 映画史 映画学 表象文化論 視覚文化 データベース 地域研究

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本映画史の先行研究において、映画が形式的かつ産業的に確立する以前の明治期の初期映画は、これまで重要な研究対象とは考えられてこなかった。その一方で、1970年代末以降、英語圏の映画研究において、1890年代から1900年代にかけての初期映画の研究は、すでに欠かすことのできない分野として確立されている。

(2) 本研究は、このような状況を鑑み、明治期のプレ・シネマ(映画前史)の視覚文化を、初期映画との連続性という観点から捉え直すことで、日本の映画研究における、新たな分析対象の開拓に貢献するものである。また本研究を基礎として、映画研究に留まらず、日本近代における視覚文化全体の関連性の連鎖を解き明かす研究に展開していくことが期待される。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、明治期に映画に先行して欧米から移入された視覚文化である、幻燈と博覧会を、プレ・シネマの観点から捉え、初期映画との連続性を考察することを目的とした。プレ・シネマと初期映画の連続性を考察することは、非欧米圏において、いち早く映画を自らの文化に取り込み土着化させた、日本近代の特性を解明しうる研究になると考えられる。

(2) プレ・シネマの主要な視覚文化として、幻燈と博覧会を選定した理由は、主に以下の二点である。第一に、これらが明治期に欧米から日本へ新たに移入された、近代のプレ・シネマの視覚文化であったという点である。第二に、幻燈と博覧会が、同時代に土着化し、社会教育と密接に結びついたプレ・シネマであったという点である。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、日本近代の初期映画を、歴史的、社会的文脈のなかで理解し、プレ・シネマの視覚文化との連続的な関係を明らかにするために、一次資料の調査にもとづく実証的な研究を遂行する点に特色がある。これは、日本映画史の先行研究における資料的限界を認識した上で、新資料の発掘を積極的に試みることによって可能となる。

(2) 本研究の独創性は、プレ・シネマと初期映画の連続性を考察するにあたって、映画に先行して欧米から伝来した、幻燈と博覧会を分析対象の中心に位置づけている点にある。これは、異なる文化圏からもたらされた、メディアとしての映画が、全く異質なものであるのではなく、いわばヴァナキュラーな近代

化の過程において、日本の歴史的、社会的文脈に取り込まれた点を明らかにすることにつながると考えられる。

4. 研究成果

(1) プレ・シネマとしての幻燈について、カタログ等の広範な資料調査を実施する過程で、明治期の浅草の諸演芸と初期映画の関係性という問題が浮上した。浅草は、幻燈の製造業者である池田都築、中島待乳、鶴淵初蔵等が数多く集まり、かつパノラマ館や観工場のような博覧会に連なる近代の視覚文化の興行施設を備えた地区だった点を再考し、本研究で新たに焦点化をおこなった。幻燈を中心に、浅草の都市空間とプレ・シネマの関係について調査分析した研究成果は、共著『浅草文芸ハンドブック』(勉誠出版、2016年)等において発表し、映画輸入以前から日本の幻燈産業が集積していた浅草の地域性と、その後の同地における映画館街形成の連続性を指摘した。

この他、幻燈に関して、前近代の写し絵や錦影絵との関係も含めた日本のスクリーン・プラクティスに関する調査分析も進め、第9回恵比寿映像祭シンポジウム「シネマトグラフ日本伝来 稲畑勝太郎とリュミエール」(日仏会館、2017年)等において発表した。

(2) 博覧会について、第五回内国勸業博覧会に関連する資料を調査し、本研究の実施以前から収集していた『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』の調査分析と対照しつつ、初期映画の上映空間に関する研究をおこなった。これらの関連資料の調査分析から、第五回内国勸業博覧会のパビリオンの一つである不思議館で上映された初期映画について、具体的なタイトル等を明らかにした。

さらに、博覧会とプレ・シネマの視覚文化との関係について、初期映画と現在のモーション・シミュレーター・ライドの映像における、ショットの形式的な類似性という観点から、新たな考察をおこなった。これらの研究成果については、すでに論文としてまとめており、「明治期のヴァーチャル・リアリティ 汽車活動写真館にみる非分節ショットへの回帰 -」(『スクリーン・スタディーズ(仮)』(東京大学出版会、2018年予定)として発表する。

(3) プレ・シネマの問題として、本研究の実施過程で、新たに無声映画の弁士等の口頭芸に関するテーマを接続させた。このテーマにおいて、第一にボン大学が所蔵する弁士の口頭芸を収めたSPレコードを対象に、特に浪花節と弁士の関係についての調査分析を実施した。第二に、映画と演劇を組み合わせた連鎖劇について、弁士の口頭芸を基礎とした大正期の映画形式と、演劇と不可分な連鎖

劇の上演形態の類似性をまとめ、表象文化論学会第11回大会(立命館大学、2016年)等において発表した。

(4)日本近代のプレ・シネマに関する本研究を進める中で、都市と地方という問題が浮上した。具体的には、地方における劇場と映画館の連続性である。このテーマについて、徳島県および香川県において、スザンネ・シェアマン(明治大学)、ローランド・ドメーニグ(明治学院大学)とともに、映画館主に聞き取り調査を実施し、徳島県西部における調査分析の一部をCultural Typhoon in Europe(ウィーン大学、2016年)において発表した。また、あわせてオーラル・ヒストリーとして共著「日本映画オーラル・ヒストリー第三回「藤本一二三」」(『言語文化』34号、2017年3月)にまとめた。

さらに、こうした地方における劇場から映画館への移行に関する諸問題を基礎に、サウンド・フィルムの普及に伴う映画館の空間的拡大という問題を、資料調査や兵庫県西脇市における実地調査等に基づき考察し、日本映像学会第43回大会(神戸大学、2017年)等において発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

上田学、「弁士の系譜 政治演説から無声映画へ」、『比較日本文化研究』18号、2016年、査読あり、16-28頁

ローランド・ドメーニグ、スザンネ・シェアマン、上田学、「日本映画オーラル・ヒストリー第三回「藤本一二三」」、『言語文化』34号、2017年、査読あり、116-153頁

〔学会発表〕(計 7 件)

上田学、「昭和前期の神戸・兵庫における映画興行の独自性」、公開研究会「映画から見る神戸とひょうご」、神戸映画資料館、2018年3月3日

上田学、「浅草地域における映画館と幻燈文化」、国際シンポジウム「日本のスクリーン・プラクティス再考：視覚文化史における写し絵・錦影絵・幻燈文化」、早稲田大学、2017年12月17日

上田学、「大正期の映画と演劇の形式的連関 日活向島と連鎖劇を中心に」、『日本演劇学会近現代演劇研究会、大手前大学、2017年7月29日

上田学、「トーキーによる映画受容の空間的

拡大」、『日本映像学会第43回大会、神戸大学、2017年6月4日

Manabu Ueda, "Relationships between Silent Film and Movie Theatre in Japan during the 1910s," Cultural Typhoon in Europe, University of Vienna (Austria), 22nd September 2016

上田学、「連鎖劇の興行形態と日本映画のスタイルとの関係性」、『表象文化論学会第11回大会、立命館大学、2016年7月10日

能地克宜、糊沢健、上田学、金井恵子、堀郁夫、「「浅草」を歩く 『浅草文芸ハンドブック』を編みながら」、『日本近代文学会2016年度春季大会、亜細亜大学、2016年7月10日

〔図書〕(計 2 件)

上田学、「明治期のヴァーチャル・リアリティ 汽車活動写真館にみる非分節ショットへの回帰」、『光岡寿郎、大久保遼(編)、『スクリーン・スタディーズ(仮)』』、2018年、東京大学出版部(刊行予定)

金井景子、糊沢健、能地克宜、津久井隆、上田学、広岡祐、『浅草文芸ハンドブック』、2016年、勉誠出版、全304頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

上田学 (UEDA, Manabu)
神戸学院大学・人文学部・准教授

研究者番号：80546143

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：

(4)研究協力者
()